

29 ナガイモ

地域慣行基準

【化学肥料】

区 分	窒素成分量 【kg/10a】	備 考
長野市松代	35	
上記以外の地域	30	

※前年秋に有機物の腐熟促進のため、石灰窒素などの窒素を含有する肥料を施用した場合は、窒素成分で4kg/10aを上限に、施用した窒素成分を地域慣行基準に加えるものとする。

(1) 特徴と吸収特性

ナガイモは施肥反応が比較的敏感なため、イモを太らせようとして多肥になる傾向があるが、施肥量を増やしても必ずしも多収にはならない。これは、窒素過多で茎葉の生育が旺盛になり、光合成によって得られた栄養分がイモの肥大に使われず、茎葉の伸長に回るためと考えられ、この傾向は窒素の追肥量が多く、時期が遅れた場合に顕著である。

10a当たりの目標収量を3,500～4,000kgとした場合、養分吸収量は窒素11～14kg、リン酸3kg程度、カリ10～18kgである。植え付け期から種イモが消耗するまでの生育初期は、つる及び吸収根の発育は主として種いもに依存しており養分吸収は少ない。種いもの養分が消耗し、養分吸収根が完成して離乳期を迎えると、土壌中の養分の吸収量が増し、地上部生育量は急速に増加する。**窒素施肥が効果的な時期は茎葉伸長期とイモ肥大期**であり、収穫前のイモ成熟期には茎葉からの窒素が移行するため、窒素をあまり必要としない。

表 ナガイモ 目標収量と養分吸収量

目標収量 (kg/10a)	養分吸収量 (kg/10a)		
	窒素	リン酸	カリ
3,500～4,000	11～14	3	10～18

施肥量は栽培条件によっても異なるが、10a当たり4,000kgの収量を目標とした場合の**標準的な施肥量は、窒素20～30kg、リン酸15～30kg、カリ15～20kg**である。基肥と追肥の割合は、リン酸の全量と、窒素及びカリの半量を基肥とし、残りを追肥とする。追肥は、萌芽1ヶ月後から8月下旬までに3～4回に分け実施する。緩効性窒素肥料を用いる場合には、基肥の比率を半量より高める。ナガイモ**栽培は半年近くの長期**にわたる上、離乳期までは多くの窒素を必要としない。そのため、窒素の肥効は、基肥よりも追肥の方が高い。こうしたことから、基肥に速効性肥料を使う場合は、全施肥量の半量以下とし、基肥に緩効性窒素肥料を利用する場合は追肥をこまめに行なうことにより、施肥効率を高めるようにする。